

すくすく たけのこ



“子と共に”の「子育て」親子で 楽しもう！



ある日のこと、何気なく新聞をめくっていたら「日本の子ども『勉強面白い』最下位 民間研究所 11 カ国を調査」という見出しが目飛び込んできました。

この調査は、民間の基礎学力研究所が行ったアジアや欧米諸国 11 カ国の 6 歳から 15 歳の子どもとその保護者 1000 組に対して行われたもので、日本の小・中学生が諸外国と比べ、勉強を面白いと思わず、得意な教科がないことが浮き彫りになったと記事に書かれていました。

少し暗い気持ちで廊下を歩いていると、元気な 3 年生の子どもたちが、私の手をつかんで「先生、来て！ 来て！」と言って、私を廊下に置かれた虫かごの前に連れていきました。そこで目にした光景は、モンシロチョウが羽化する瞬間でした。



顔をギリギリまで虫かごに近づけながら、ジッとその様子を見つめる子どもたち。「すごいね」「先生、卵から育てたんだよ」と、得意げに語ってくれました。

その私たちの後ろでは、カエルを捕まえた子どもたちが「入れものない？ 入れもの！」と言って、水槽を探し回っています。

私は、なんだか嬉しくなって、子どもたちと一緒に「今年一番の感動！」と叫んでいました。

翌日は、1 年生の子です。「先生、こっち！ こっち！」「私のアサガオ、こんなに大きくなって、ツルが支柱にまきついてきたんだよ」と目を真ん丸にして話しかけてきました。



その翌日、今度は 2 年生。

「先生、昨日は、一本の鉛筆を最後まで使いきると、学校から大阪湾まで線を書くことができると教えてくれたけど、このマジックペンだったら、どこまで書けるかな？」と矢継ぎ早に尋ねてきました。



それを横で聞いていた 5 年生が、「先生、大阪名物のたこ焼きの“たこ”も、実はアフリカ産だって知っていましたか？」と得意げに質問してきました。



こうした子どもたちの生き生きとした姿を見ると、本来、どの子どもにも、このような「未知のことを知りたいと思う心」や「発見する喜び・感動」が満ち溢れていると思えてなりません。

さて、わが子が小さいうちに、“よい習慣”を身に付けさせたい、“学びの力”を伸ばしたいと思うのは、どの親御さんも願われているところです。しかし、なかなか思うようにいかないのも現実です。

ベネッセ教育総合研究所によると、幼児を抱えるお母さんの 7 割が、コロナ禍で我が子がうまく育っているか不安だと感じているそうです。

「この育て方でよいのか」という迷いと、「確かな手応え」が感じられないまま、子育てに奮闘されているのが実態ではないでしょうか。



かつて、私が親として、「子育て」に悩んでいたとき、先輩から『子育て』から『子育て』に気持ちを切り替える」というアドバイスをいただきました。「子育て」は、「親が子を育てる」ということ。

「子育て」は、「親が子と共に育っていきこう」という意味です。

「子どもは、植物と同じように、自ら成長したいと思っている。親の役割は、その子どものもつ“可能性”と“自ら育つ力”を信じて、愛情を注いでその子に関わり、見守ること。そして、『共に進んでいく』と心を決めること。だから、子と共に育っていき“子育て”なんだよ」との励ましの言葉に、肩の荷がおりたように感じ、自然体でじっくりと子どもに関わることができるようになりました。それからは、一緒に取り組むことに“楽しさ”を感じるようになりました。



子どもは、外から入ってくる事柄に「好き」「嫌い」という「ラベル」を貼っていきます。そして、その後、その事柄を理解・判断していきます。

つまり、物事に取り組むスタート時点は、「好き」「嫌い」という“感情”が、とても大きな役割を果たしているのです。

学校という教育現場でも、勉強そのものが好きというよりも、〇〇先生が教えてくれる勉強が好き、クラスの人と一緒にする勉強が好きということから、学ぶことに興味を持ち始めたという例は少なくありません。この傾向は、年齢が低いほど顕著にあらわれます。

時代が大きく変化してきている現代は、子どもたちの学びの動機(モチベーション)も昔と異なっています。

教育デザイン研究所代表の石田勝紀さんは、講演の中で、「気合い・根性・努力」の「20世紀型キーワード」に対して、「21世紀型キーワード」は、「楽しい・面白い・ワクワク」だと主張しています。

一生の間に、親子が共に過ごすことができる時間は、母親が「7年6カ月」、父親が「3年4カ月」だと言われています。



その半分以上は小学校時代までに過ぎ去ってしまいます。

一生は長いようで、子どもと一緒にいることができる時間は短いのです。この限られた時間を大切に過ごしていきたいものです。その時間を大切にするカギは、「共に楽しむ」ことだと思うのです。



創立者池田先生は、子どもたちに、

「空はなぜ青いのか？

磁石に鉄が

吸い付くのはなぜか？

恐竜はなぜほろびたのか？

宇宙の果ては

どうなっているんだろう？

『なぜ？』『どうして？』と

問いかける心

それは『科学者』の心だ」



と語られました。そして、

「本当に頭がいい人とは、たくさんのもんごとを知っている人ではない。むしろ、『なぜ』『どうして？』と、いっぱい疑問をもって問い続ける人ではないでしょうか。そして、すぐに答えが出なくても、ねばり強く考えぬいていく人です」

と呼ばけられました。（『希望の大空へ』「小さな疑問が大きな力に」 強調・下線は筆者）

赤や青、紫など、色とりどりの紫陽花を眺めながら、こうした「子育て」、いえいえ、「子育て」でありたいと思う昨今です。（晃）

